

《書評》

言うべきことと見るべきもの

——樋口克己『ニーチェ』(ナツメ社)——

江 川 隆 男

ルネ・マグリットの「これはパイプではない」に倣って、誤解を畏れずに、しかし敬意を込めてこう言おう。「これはニーチェではない」と、この表現は、実は本書(まさにニーチェ小事典と呼べるような著作)にとってもっとも相応しいものではないだろうか。というのは、本書においてニーチェの哲学は、何よりもまず「矛盾の哲学」として規定されているからである。

本書は「図解雑学シリーズ」の一冊として書かれ、ニーチェの哲学を論じ解説したテキストとそのテキストをさらに説明する絵からなる。しかし、ここでの言葉と表象像、文章と絵、文字と図像、言語記号と造形的要素、テキストと図解との間には、いかなる関係が存在するのだろうか。それは熱望された関係であろうか。あるいは、テキストはそもそも図像に出会っているのだろうか。本書の左頁に印刷されたテキストは、右頁の図解に出会っているのだろうか。いずれにせよ、図解とニーチェという、言わば水と油のような関係が、あるいは和解不可能な関係が本書を成立させていることはたしかである。言い換えると、本書は、解と問題、すなわち〈図-解〉と〈ニーチェ-問題〉との関係がまったく存在することなく、それゆえきわめてニーチェ的に成立しているということである。本書の左頁のテキストは、つねに右頁の図像に向かって〈これはニーチェではない〉という沈黙の叫びを発しているかのようなのである。本書を手にとることによって、こうした問題意識が第一に浮上してくるように思われる。しかしこれは、別の理由から、つまりニーチェの哲学ゆえに、その哲学的固有性ゆえに生じ

た問題でもあるだろう。何故なら、既存の道徳的な知性や感性を大前提として、その枠に向かって自己の思想を放り投げることをもっとも嫌悪した思想家がニーチェだからである。永遠回帰という一つの問いを構成する諸問題は、いかなる解にも依存することなく、この問いを構成しなければならないからである。永遠回帰はこうしたものとしてつねにわれわれに襲いかかってくる思想なのである。本書においては、たしかにテキストは図解を規制しているが、しかし、テキストが直接説明しようとしているのは、むしろ右頁の図像とはまったく似ていない、問題としての像、あるいはその意味では、表象不可能な問題——図解化不可能な問題、すなわち、解なき問題、神の死、永遠回帰、権力への意志、生成、等々——である。それゆえ、もし本書に最悪の読み方があるとすれば、それは、最初に右頁の図像を見て、その説明や回答を左頁のテキストに求めることであろう。

さて、本書は全部で十の章から構成されているが、第十章「ニーチェ哲学の周辺」を一つの付録と考えて、第一章「悲劇の哲学」から第四章「生成と存在」までを第一部、第五章「悦ばしき知識」から第九章「ニヒリズム」までを第二部という風に、本書をほぼ二つに大別することができるだろう。第一部は、ニーチェ哲学の生成の歴史的背景、彼の哲学的なスタイルや立場など、基本的な思考のイメージが提示されているので、どちらかと言うと予備的考察といった色合いがつよい。これに対して、ここで言う第二部は、本書の中心部分（私としては、この部を構成する各章の配置に少し違和感を感じるが、ここではその点には触れないでおく）であり、ニーチェ哲学に欠くことのできない本質的な主題群から構成されている。しかしそれだけでなく、そこには著者の見解も一貫性をもって十分に反映されている。本書の読書案内にも挙げられていた、例えば、ピヒトの『ニーチェ』が文脈を重視しつつ『ツァラトゥストラ』等の中心的著作を読解し、またドゥルーズの『ニーチェと哲学』がその多くを『道徳の系譜学』に依拠している——そこでは、『道徳の系譜学』はカントの『純粹理性批判』を書き直したものだとして規定される——という特徴をもつものに対して、本書は、とりわけ『悦ばしき知識』に著者のパースペクティヴを据えて、そこから開かれてくるニーチェ哲学を問題提起するという特徴を有していると言えるだろう。

著者はニーチェの哲学を何よりもまず「矛盾の哲学」(p.42, 288)として捉える。ニーチェにおける認識、道徳、意志、等々 (cf. p.214) に関する矛盾形態は、実はすべて「生成を解釈し表現する必要」から生じたものだ、と著者は言う。ただし、われわれは、これらを弁証法的な諸要素と考えてはならないし、弁証法のもとでこれらの形態を理解してもならないだろう。「ひとが弁証法を選ぶのは、他に手段がないときである。(……) 弁証法はもはや他に〈武器〉をもたない連中が手にする、緊急防御にしかすぎないのである」(『偶像の黄昏』, 「ソクラテス問題」)。ここでの問題は、こうした矛盾形態をそのまま肯定し、またそれらを生み出していた形式そのものを克服することによって、その意味と価値を変えることである。言い換えると、ニーチェにとっては、矛盾形態は一つの価値形態だということ、それは、総合や分析の契機ではなく、何よりも価値転換の契機だということである。言い換えると、それは、矛盾という思考の単なる言語的道具から、価値や意味といったわれわれの諸条件を積極的に変化させるような思考の「武器」をつくる実験をおこなうことである(武器としての遠近法については、p. 50 を参照)。それは、「実験の精神」を形成すること、そして同時に、あるいはむしろ「瞬間」的に、「生を表現する」ような表現形式を獲得することであり、ニーチェにとっては、それがアフォリズムというエクリチュールの様式なのである。著者は的確に次のように述べている。「アフォリズムという文体は、生を表現することで、生をその本来の姿に近付ける哲学のスタイル、遠近法の運動・変化を加速するスタイルなのだ」(p.52)。ニーチェの哲学を構成する最小の単位は、語でも文でもなく、一つのアフォリズムである。アフォリズムは、私の言葉を使えば、〈パラ・グラフ〉主義の一つであり、意味と価値を変形するのに要する一群の言説の纏り、すなわちその変形過程そのものをつくり出す認識論的質料と論理的形相のクラスターから構成されるものである。したがって、たとえ一行のアフォリズムであっても、われわれはそれを徹底的に一つのパラ・グラフとして理解しなければならない。

本書は永遠回帰を真正面から取り上げているが、そこでは時間の二つの読み方が提起されている。それは、著者によれば、「開いた直線的な時間

の形式」と「閉じた円環的な時間の形式」(cf. p.144)であり、それらはおそらくクロノスとアイオーンという二つの時間形式に対応すると言えるだろう。つまり、「直線的な時間」とは物が空間を占有するように占有することのできる時間のことである。したがって、この形式のもとでひとは、時間を「運動の数」として測定し、またカントが言うような、「部分的時間」をどこまでも想定し、こうしていかなる物の状態の持続についてもこの時間上での始まりと終わりを規定できると考えるのである。これに対して、「円環的な時間の形式」においては、過去と未来は無限の同一性を示し、現在はいくつかの過去と未来へと無際限に引き裂かれ、それゆえ、この時間形式のもとでは、ある出来事がどこで始まりどこで終わったかを正確に規定することはできないのである。物体によって空間のように占有される〈クロノス-時間〉とはまったく異なった時間、それが〈アイオーン-時間〉である。永遠回帰について言われるべき時間とは、こうした時間なのである。

「永遠回帰」のフルネームは「同一物の永遠回帰」(p.132)である、と著者は言う。ただし、これを何らかの物 a があたかも永遠に回帰し続けることだと理解してはならない。もしそう解したならば、この物 a は何度回帰したのか、これは何度目の回帰なのか、という先の〈クロノス-時間〉を前提としたような表象的な問いが永遠回帰について生じてしまうからである。しかもそこでは、この同一物 a は、回帰の順序的繰返しという最低限の差異のもとで捉えられた、単なる〈同じような物〉に還元されてしまうからである。厳密に「同じもの」に関する回帰思想でなければ、われわれの「最も重い認識」には値しないのである。それならば、「同一物の永遠回帰」を物 a の完全で無差異な持続、つまり「変わりばえがしない」持続と考えればいいのではないか。著者は、この無差異な持続を言い換えて、「自分の生きている時間が、虚しくて“変わりばえがしない”と感じるとき、その時間は、実際に何かが繰返すのではなくても、変化しない同じ時間、無限の繰返しのように感じられる。つまり、瞬間の中に無限の虚しさがあるのだ」(p. 132)と言う。たしかに、これは永遠回帰思想の「一つの、意味」であり、言い換えると、可能性の条件として永遠回帰の意味、すなわち、人間の生存・認識における可能性の条件たる「根本誤謬」(cf. p.84)

に等しいような永遠回帰の意味であろう。しかし、こうした「無の無限の連続」に対して、まったく肯定的な意味で永遠回帰について言われるべきことが、すなわち「同一の無の無限の回帰」(p. 266)が提起されることになる。同一物とは「同一の無」であり、さらに言う、それは〈同一の瞬間〉ということになる。「同一物の永遠回帰」とは、こうした同一の瞬間を「無限倍にして見せること」(p. 266)である。同一の瞬間は、言わば〈無限の属性〉としての一つの瞬間であり、したがって別の瞬間によって補完される必要などないし、その完成を他の現在に委ねることもない。言い換えると、中途半端な意志は回帰しないということである。「肯定への意志」だけが回帰するのである。回帰の瞬間は、〈無限の属性〉であり、それゆえ「永遠なるもの」の形相を有したものである (cf. p. 266, 268, 270)。単に決定的瞬間があるというのではなく、「瞬間とは本来すべて決定的なものなのだ」(p. 270)。ここで本書の主張は頂点に達する。

ところで、本書の右頁には、実は、単に見えるものではなく、問題提起的な表面像、解をもたない表象不可能な〈絵－問題〉が、すなわち一つの見るべきものがある。それは、かなり頻繁に描かれている。それは、表象不可能であるがゆえに、流動的な形態をもって、青でベタ塗りされた平面のことである。本書においてこれは、生成、エネルギー、権力への意志、生、等を表示しようとする場合にはつねに描かれるものである。ニーチェに関するあらゆるテキストに対して、相応しいイメージがあるとすれば、それはこのように描かれた表面ではないのか。哲学において思考のイメージを語ることの価値転換、つまりその唯一の価値形成は、図や表象像からこれに付着した一般的な意味を払拭し、それを変形するプロセスを示すことである。そのためには、われわれは「表面、皺、皮膚に踏み止まり、仮面を崇めること」(cf. p. 118, 『悦ばしき知識』, 「序文」)が必要である。ここで言われる踏み止まるべき「表面、皺、皮膚」とは浮上した「深淵」であり、その意味で無－底とは、底なしの深さということではまったくなく、底が表面へと上昇することによってつくられた平面のことである。ニーチェは言う、「ギリシア人は表面的であった——深さからして」と、イデア的な高さは、実は深さの問題の一つであり、単に垂直的な表面の問題のことである。ここでは、〈図－解〉はまさに〈図－問題〉に——すなわち、問題

提起的平面に——なるのである。

テキストと図像に「共通の場」(フーコー)、言葉と表象像に共通の感覚、言語記号と造形的要素に共通の良識、これらの共軛関係を喰いちぎろうと襲いかかる獅子のように、左頁のテキストは右頁の図像に対してつねに言明する。〈これは永遠回帰ではない〉、〈これは権力の意志ではない〉、〈これはアリアドネではない〉……、と。こうした意味において、〈これはニーチェではない〉と至るところに書き込まれている本書は、それゆえよりニーチェ的である。ニーチェ的とは何か。それは、例えば、「なぜひとは現に……するのか」、「なぜひとは実際に……されるのか」というように、すべてを生存の様式に関する系譜学的な諸問題に転換することである。それはまた、存在と道徳への本質的な問い、すなわち、ほとんど道徳癖と言えるような問い方——「……とは何か」——に抵抗するようにして、存在の仕方やその様態に関する問題提起——「誰が……」——を獲得することである。

入門書とは、その門の入口で読者を既に迷子にさせたり、そこでもたたさせたりするような本のことではなく、むしろ一挙にその論じられるべき対象の核心、中心へと読者を連れ去るような耐久性のある書物のことである。本書はこうした要求に完全に応えている。体系的に逸脱する作法、そうしたニーチェにおける「礼儀作法」(cf. p.118)を身に付けた者だけがそうした核心へと読者を導くことができると同時に、またそうした核心から出発しない限り、こうした作法は身に付かないだろう。本書は、まさにニーチェ思想の核心部分へと読者を導き、その中心からニーチェ思想の極限、境界面に向かって読者を解き放つような力をもっている。われわれは〈図-解〉に騙されてはならない。創造されるべき過去、そうした「過去は未来の延長上にある」(p.274)。しかし、そのためにはしっかりと欲望(意志)することである——難点を論うだけの思考ではなく……、「奇跡の薬」を……見出すこと、つくることを。